

一 己やれ自ら立たずば

後生こそ一人しのぎなり。後生ばかりでなく、今生も過去も、世の中一切萬事、一人しのぎであつて、自分に忠實なるものは結局自分でなくてはならぬ。他から如何程云つたかとして、自分が本氣にならねば、捗るものでない。眞實の實行者は自己である。「是非とも左様したい、左様せねばならぬとは、飽迄承知してゐるが、世間が世間だから、自分ばかり夫を實行した處で、どうなるものではない、第一割が悪くて困る」と云ふがそれはまだ氣付やうが足りないのである。眞の闇の夜に、多人數のものが方角の見分もつかずに右に迷ひ左に衝き當つて困つて居る。其の人達が手にく、提灯も蠟燭も一寸も持ちながら、一人も火を點して居らぬ。そして誰か點ればよいにくと口々に罵り合つて居るとしたら、云何であらう。随分變なものではあるまいか。他の事いはずに、先づ自分自ら火を點せば、其の脚下も見えてくる。他の人も提灯のお蔭を知つて眞似て來る。一人つけ一人ともせば、遂には皆んな明くなる。他が不眞面目だから自分も不眞面目、他が不正直だから自分も不正直、自分ばかり正義を守つても云何もならぬ。誰か正直になればよいにくと、罵り合つてみても、それは百年黄河の澄むのを待つよりも愚な事である。割がよいの悪いのと、それは實行してみてもからの話、實行せぬ内はそんな事を云ふ資格がない。

此邊の者は佛法を聞かぬ、寺參りをせぬ。誰か法義者になればよいにくと、云つてみた處で、自分が參らぬ以上、其の實況も解らねば又その資格もない。否そんな人に限つて法義には疎い。眞實に信仰の必要を感じたならば須らく自分が率先して求道聞法せねばならぬではないか。信心を得ねばならぬと知りつゝ得ずに居る。正直にせねばならぬと知りつゝせず居る。そん

な矛盾むじゆんを敢あへてする自分じぶんを省かへりみもせず、人の身ひとみの上うへの穿鑿せんさくは、少すこしお門違かどちがひではあるまいか。如何いかに世よが濁にごつても、自分じぶんが人の不徳ふとくの眞似まねをせねばならぬと云いふ義務ぎむはない。要えうはたゞ自分獨じぶんひとりが守まもる處ところあればよいのである。近江聖人あふみせいじん中江藤樹先生なかえとうじゆせんせい一人ひとりが眞面目まじめであつたため、三里四方りほうに嘘うそ云いふ者がなくなつたと申まをします。善道大師獨ぜんだうだいしりが佛ほとけの正意しやういを明あかしたため、總すべてが佛ほとけの正意しやういに歸きしたと云いふ。親鸞聖人しんらんしやうにんがあつたため、この眞宗しんしゆが出來でた。道みちに志こころをす者は、自分じぶんの周圍しゆゐを罵ののしる前に、先まづ自分じぶんを責せめねばならぬ。